

資料紹介

第二回原水爆禁止世界大会に出席したソビエト代表 A・ソフローノフの旅行記

抄訳・解説 エネビシ・藤目ゆき

アナトリー・ウラジーロヴィッチ・ソフローノフ(Анатолій Владі́мирович Софрoнов, 1911-1990) はロシア人の作家、翻訳家、ジャーナリスト、詩人、戯曲家、編集者であり、1948年と1949年の二度、スターリン賞を授与されている。1948年から1953年にかけてソビエト作家同盟の書記をつとめた。『アガニョーク(Ogonyok)』は19世紀末から今日まで刊行されている、ロシアで最も長い歴史を持つ雑誌の一つであり、ソフローノフは1953年から1986年の長年にわたり、この雑誌の編集長であった。ここに紹介する文章は、ソフローノフが『アガニョーク』(10月21日号/11月12日号)に連載した、1956年8月の第2回原水爆禁止世界大会のために来日した際の旅行記の抄訳である。

1954年に米国がビキニ環礁で行った水爆実験は広範囲に死の灰を撒き散らせ、被曝した漁民の1人である久保山愛吉氏は放射線障害のために帰らぬ人となった。米ソ冷戦下の核軍拡競争が続く中、原爆被爆国でありビキニ実験による被曝をも体験した日本において原水爆禁止運動が高揚し、1955年に広島で最初の原水爆禁止世界大会が開催される。世界の人々が日本の被爆体験と原水爆禁止運動に注目し、国境を超えて共感と支持が広がり、1956年に開かれた第2回原水爆禁止世界大会には世界中から37人の海外代表が参加した。大会の2日目には日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)が結成されている。

海外代表は中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国、ソ連、チェコスロバキア、フランス、ポーランド、ルーマニア、米国、フランス、英国、ベルギー、スウェーデン、スイス、イタリアなどから参加した。ソ連からは、中国・朝鮮と並ぶ人数の代表団を編成して来日した。ソフローノフは、そのソ連代表団の団長を務めていた。他のソ連の代表にはフラードル・イワノヴィッチ・コジエヴニコフ(医学博士・モスクワ国立大学教授)、ウラジミール・ワシリエヴィッチ・エルマコフ(医学研究所教授、医師)、オリザ・コンスタンチーノヴァコロボヴァ(レニングラード高校教職員組合委員長)、セルゲイ・パトローヴィッチ・ハーリン(通訳)らがいた。

原水爆禁止運動に関する記録を残し研究することは国際的に重要な現代史の課題であり、第一に注目されるべき宣言文や議事録などの公的記録はかなりの程度まで資料として集成され、公刊されてきた。が、それに比して、運動の参加者それぞれの観察や感想、参加者同士の関係などの個人的な記録はあまり公にされていない。特に外国代表については来日中の新聞や団体の機関誌などにいくらか紹介される程度であり、紹介されても氏名や団体名の記載に留まることも多い。その意味でソフローノフの旅行記は、各地の取り組みや出会った人々との思い出も書かれ、当時のロシア人の目から見た日本の社会や運動の様子が生き生きと描かれ、日ソ共同宣言(1956年10月)直前の日ソ交流を記録するものになっており、初期原水爆禁止運動の資料として興味深い。

米軍基地を通過して長崎に到着

昨夜、海外代表のほとんど全員が汽車で長崎へ向かったが、私たちは福岡まで飛行機で飛び、そこで長崎行きの汽車に乗ることになった。暑い中、同行者で作家の和田が時計を見て列車の心配をしている。飛行機は福岡まで 3 時間。飛行機の翼の下に現れてきた巨大な飛行場には、米軍の戦闘機があちこちに見える。飛行機のそばにいるバスに乗るために、有刺鉄線柵のゲートへ向かった。飛行場では建物の建設中だった。工事車両や忙しく働く麦わら帽子の日本人作業員たちが見える。ゲートの前には守衛が立ち、有刺鉄線に「撮影禁止」の貼り紙がある。日本人の乗客は、米軍の戦闘機が支配的に翼を広げる飛行場の敷地から無遠慮に追い出されて気分が悪そうだった。

歓迎の言葉をロシア語で書いた看板と花を手を持った何人の若者が私たちを有刺鉄線柵の隣で迎え、花を渡してくれた。乗用車で福岡市の駅へ向かう。駅で大勢の人が歓迎し、挨拶の後、誰かが手を振ったら青年男女が手をつなぎ、揺れながら覚えやすい素敵な歌を歌った。私たちの正面では熱心な表情でアコーディオンを弾く奏者がいて、その指は真珠色の鍵盤上を走った。「原子爆弾を禁止しろ！という曲です」と、若者の一人がロシア語の発音に苦労しながら教えてくれた。「ロシア語が話せるのですか」と嬉しくなって聞くと、若者は「少しだけ。私一人じゃなくて、ここにロシア語を勉強している学生は何人もいますよ」と言う。「ソ連で映画化された『オセロ』はまもなく日本で上映されますか？」「セルゲーイ・フォードロヴィチ・ボンダルチュークの制作している映画ですか？」などと話が盛り上がり、ロシアの劇場や文学、医療分野での出来事を彼らが詳しく知っているので驚いた。和田が焦って「ここから長崎までどれぐらいの距離でしょうか」と迎えに来た人に聞くと、300 キロだという。結局、汽車で早岐駅に行き、そこで乗り換えて、残りの 30 キロをタクシーで行くルートが一番早く、長崎に深夜 12 時に着くとわかった。列車の中で、長崎へ行く大阪からの代表たちと会った。「大阪から 100 人ぐらい参加する予定です」とのことだった。

長崎の街には破壊の跡がまだ残り、仮設住宅が建っているが、商店街は雑多で賑やかだった。蓄音機の音が聞こえ、アメリカ映画の騒々しい広告が流れ、歩道に面して食器店や靴屋の広い屋外販売台が並ぶ。長崎の原水爆禁止第二回世界大会には約 3000 人が参加し、満員で会場に入れない人もいた。広島、長崎、東京、大阪、沖縄、北海道、四国の代表たちが参加した。イザベル・ブルーム、マリー＝クロード・ヴァイヨン・クーチュリエ、モニカ・フェルトン、中国の作家魯迅の妻を団長とする中国代表团、チェコスロバキア、ルーマニア、ポーランド、スイスの代表团も来た。子供たちから代表たちに花束を手渡した。正午に長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念像の建つ丘で平和祈念式典が開催された。青空が広がり蒸し暑い中、式典の参加者に日陰を作るために大きなテントが立っている。遺族が捧げた無数の花束が平和祈念像の足元に置かれており、たくさん子どもたちがいる。鳩を空へ飛ばして式典が始まり、市長は大きな字でスピーチの内容を書いた黄色の巻紙を開いてスピーチを始め、「原水爆禁止のために全力を尽くしましょう」と呼びかけた。続いて少女が立ち、平和祈念像を見ながら語り始めた。「母と弟は原子爆弾によって殺されました」。ラジオの拡声器は少女の悲しい言葉を遠くまで響かせた。遠くに、鬱蒼とした森で覆われた山々が暗く見える。空には軽飛行機が旋回し、鳩が舞う。式典の参加者たちは泣いていた。

平和祈念像は「人々よ、警戒を怠らないように！」と言っているような姿勢で手を上げている。伸ばした一方の手は、発言者の言葉と合わさって「恐ろしい悲劇の繰り返しを許しま

せん！被爆諸霊の冥福を祈ります。あなた方の子孫はあなた方を忘れません」と伝えようとしているように見える。

太陽は明るく輝き、式場を飾る銀色のリボンや平和祈念像前のテントの布から光を反射させる。女子生徒の合唱団が歌う悲しい歌は強く響く。11年前にアメリカが原爆を投下した。人類の希望は打ち砕かれ、幸せは奪い取られた。長崎や広島で体験した恐ろしい経験は人々の肉体だけではなく心を深く傷つけた。海外からの参加者の一人が「原子爆弾とは何かを理解するためにここへ来るべきです」と言った。

原爆犠牲者は次々と演壇に上がった。中には自分で上がれる人もいれば、人に助けをもらいながら上る人もいる。その場面を見るのは苦しかった。広島から来た少女はこう発言した。「アメリカが原爆を落とした時、私は小学校1年生でした。何も悪いことはしていません。どうしてその私の上に原爆が落とされたのですか？私は今では健康が回復していますが、日本人や世界中の人々に私の経験を知ってほしいと思いました。昨日、広島で一人の女性が自殺しました。両親が被爆者との結婚を許さなかったからです。全世界の人々に助けを求めたいです。私たちを助けてください！」

どこへ行っても苦しい経験を思い出させるこの街で開かれた原水爆禁止大会の最中、最も多く使われていた言葉の一つは「生きる」という言葉だった。人間は生き残ることを望んでいる。夕方、長崎の街が多彩な提灯を手に持った生徒たちで満ちあふれた時も、悲しい日に生きることの素晴らしさを歌と踊りで伝えようと何十万人の市民が浦上公園に集まった時も、私たちは人間の強い力を感じた。広場で10人の若者が長い棒で龍の長い胴体を揚げて出てきた。龍は口を大きく開けて太陽を表した金の玉を飲み込もうとする。これは「龍と太陽」という踊りだ。力強く踊る彼らの一人一人が龍の魚鱗の胴体を上手に動かす。龍の頭を棒で揚げた若者は一番腕がよかった。彼は他の踊手の邪魔をしないように龍の頭を上手に回し、時には玉を噛もうとしているように踊る。が、金の玉は常に龍から逃げる。この龍の踊りは古代中国の舞踊に由来するという。ホテルに戻る途中で案内人の女性が手にマイクを持って長崎の歌を歌ってくれた。その歌詞は、長崎の町が美しく、綺麗な花がたくさん育ち、人々が楽しい生活を送っているという良い歌だった。彼女は揺れるバスの中で、音楽なしに「蝶々夫人」のオペラを歌ってくれた。

日本のうたごえ

会議2日目に和田が「今晚、1時間ほど皆様を日本のうたごえ運動に参加してもらいたいです」と言った。日本のうたごえ運動の創始者である関鑑子について聞いたことがあったが、この運動が日本でどれほど広がっているのか想像がつかなかった。車は丘の上へ上がり、狭い道を急に曲がって2階建ての建物の前で止まった。中に人がいる様子もない。が、急に人の声が聞こえ、玄関に男女が出てきた。私たちを待っていてくれたのだ。薄暗い明りの廊下で100足の靴が並んでいた。藁で作られた柔らかい敷物の上を歩いて小さい部屋に入ると、そこに目が輝く100人近くの若者が壁に沿って立っていて、親切に迎えてくれた。「長崎では原水爆禁止国際会議と同時に日本のうたごえ合唱団のセミナーが行われています」とセミナー企画者が言う。私たちは東洋の習慣に従って胡座をかいて床に座った。私たちに1時間しかないため企画者は急ぎ、若者たちが一人ずつ自分の代表する街の名前と合唱団のことを紹介してくれた。「北海道から来ました」と背の低い少年が言う。北海道には6つの

合唱団がある。「本州から来ました」と他の若者は言う。「東京から来ました」と3番目の若者が言う。東京には3つの合唱団があり、その他に劇団や芸術楽団もある。「四国の高知から来ました」と濃青色の服を着た男子が言う。胸がドキドキした。世の中に良い人がたくさんいるのを確認できた感動。生き方を模索する素晴らしい若者たち。アメリカ人が日本で普及宣伝している、倫理を低め人間の崇高な使命に不信を示すような物事に対して彼らは抵抗している。この小さい部屋に、自分の目で死を見たが故に生きる熱望を持ち、そのために全力を尽くすことができる新しい日本人が立っている。

「私は沖縄からきました」と一人の若者が言った。この言葉だけで十分だった。沖縄はアメリカの占領に対する日本人の闘いの象徴だ。「私たちは宮崎からきました」と青いワンピースを着た女性は隣の同じ服装の仲間を指しながら、「私たちは着物工場で働いています」と続けた。「今から、歌を歌いましょう」と班長が言い、突然部屋に懐かしい歌曲が流れた。夢を見ているような気がした。日本の若者たちは歌っている。外国語で歌っているのに、ロシア語のように聞こえてくる。20年前に、ミハイル・イサコフスキーが作詞し、マトヴェイ・ブランテルが作曲した「カチューシャ」はここまでやって来たのか？ 帆なしに海と山を渡って、大勢の人々に好かれて、違う言語で話す人々を一つにするこの歌曲の運命は羨ましい。少し寂しいけどおなじみの最も古い歌がもう一つ響いた。「山から金を掘るバイカル地方の未開な草原で」と伴唱したくなる。その次に、映画「クバンコサック」の歌が演奏された。映画そのものより歌が単独で日本まで伝わっているのだ。

後年、日本を訪問した時にも「日本のうたごえ」合唱団と何度も会うことができた。が、この運動の優秀な代表たちとの最初の出会いは心に深く残った。今、私たちの前で黒い目をした若い男女は手をつないで左右に揺れながら、日本人にとって「全世界民主青年歌」となった「原爆許すまじ」という歌を歌っている。日本を旅する際に私たちはいつも中国、フランス、スイス、ルーマニア、チェコ、日本の若者と肩を組み何度もこの歌を歌っていた。民衆の働きかけで米国と英国の政府は原水爆製造と原水爆の爆発実験を禁止するソ連の提案を支持し、母親たちは子どもの命のために恐れを知らずに闘う時代が来ることを私たちは確信する。歌の曲があまりにも美しかったので、歌詞をロシア語に訳してみた。この歌は木下航二が作曲し、歌詞を浅田石二が作詩した。

若者たちと会って興奮した私たちはホテルに戻るため車に乗ると、運転手にゆっくり走るように頼んだ。アジアのどこでもあるように日本でも商店街は夜遅くまで賑やかだ。夜になると小さな店の周辺は最も賑わう。客が多いからではなく、むしろ少ないから蓄音機の音が聞こえ、売り手は客を誘い、ネオンランプは店のそばに吊した多彩な飾りを照らしながら点滅する。交差点でチェックの薄いシャツを着た背の高い何人かの若者が立っている。彼らの前で小さい日本人がお辞儀をしている。アメリカ人を店に誘っているようだ。蓄音機からジャズ音楽がうるさく流れるが、その音は日本の本当の主人である日本人の優しい声を忘れさせることはできない。

被爆者の証言

原水爆禁止世界大会で原水爆禁止する決定を全員が合意した。会議の参加者全員がもう一度起立して「原爆許すまじ」を歌い、会場の拍手は長く続いた。

「平和万歳！」

「全世界の人々の友好関係万歳！」

海外代表たちはこの日、原爆被爆者たちと会った。学校の小部屋の広いテーブルの傍に広島と長崎の被爆者たちが立っていた。会議の会場では彼らを他の参加者たちから見分けるのは難しかったが、ここの部屋に被爆者全員が集まっていた。彼らに何か共通性があるように思われるのは、ほとんどの人の顔に残る傷跡のためではなく、胸を重くする何かは彼らの目に宿っていたからだ。

広島から来た若い女性が最初に話した。「息が苦しいです。働くこともできません。今も病院に入院している人々がいます。私たち被爆者は健常に見えますが、実は治らない病気にかかっています」。もう一人の少女が口を動かしたが、何も聞こえなかった。かわりに隣に立つ白髪の人が話した。「すみません、私の娘には話すことができないのです。原爆が投下された時に娘は家にいました。その時、11歳でした。今は22歳です。原爆投下後10日すぎた頃に娘の歯茎が痛みだし、その後しばらくして声が出なくなりました。手術を受けましたが変わらなかったのです」。彼女の父親は沈黙していた。娘は泣きながら父親の胸に身を寄せた。

会場の静かに凍りついた雰囲気破ったのは、顔と首に深い傷跡がある背の低い人だった。彼はシャツを脱ぐと体の右側に縦横に傷跡が刻まれた体が見えた。長崎の山口という人だった。「私は火傷し、死ぬ寸前になり、常に高熱が出ていました。自殺したいと思った時もあります。生きる希望がなかったのです」。彼は息が苦しくなり、話し続けるのが大変だった。マリー＝クロード・ヴァイヨン・クーチュリエは涙を流していた。彼女がハンカチで目を拭くと、彼女の手には刻まれたナチス強制収容所の青い囚人番号が目立つ。山口は話を続けた。「死のうと決めたとき、こう思いました。私は証明するものは何か？ 誰に証明するのか？ と。いや、私は生き残らなければいけない。他の人々の役に立つために生き残るべきだ、と考えたのです。人々に原爆禁止の闘いに呼びかけていくために生き残るべきだ、と。私は白血病です。ずっと寝ていないといけません。しかし、すべての力を尽くしてこの会議に参加したいと思ってベッドから立ち上がってここに来ました。皆さんは帰国してから我々の事実を伝えてください。世界に平和を築くために行動してください」。山口は座り、両手で頭を押さえ、テーブルに伏せた。会場は再び静寂に包まれた。

「私は広島の前爆一号と言われていました」と左手で扇子を握った人が言った。「吉川といいます。広島出身です。6年間入院し、植皮手術を16回ほどしました。1951年4月2日に退院して、広島で被爆者支援グループを立ち上げました。が、私たちが被害者にしたアメリカ人は助けてくれません」。隣に立っていた人が小声で彼に何かを言うと、彼は一瞬話を止めて自制しようと微笑んだが、頑固に言い続けた。「アメリカ人は悪いのです。日本政府も私たちの状況を分かっているのにたいした援助をしません。政府は戦争に備えて予算を組んでいます。アメリカの強い圧力の下でそうしているのです。しかしそれを私たち国民はよく知っている。今こそ被害について声を上げる時期です」。吉川は一瞬話を止めて、海外代表たちに向けて言い続けた。「原爆病は不治の病ではない。原爆を製造できたならば原爆による病気を治す方法も見つかるでしょう。病気を治す薬を作って私たちに送ってくれるようお願いしたい」。そう言いながら彼は怒ったような顔つきになった。「25人が植皮手術をしてもらうために渡米したのを知っていますか？ アメリカ人は何千人の被害者の中から25人しか選べなかった。アメリカ人は植皮手術を広く宣伝しているが、手術がうまくいっ

ている場合は少ないことが明らかになった。日本で手術をするより悪い。なぜ、わずか 25 人だったのですか?! 彼らは恥知らずにも世界中に宣伝している。自分の手で被害者にした大勢の中からわずかな人数だけを宣伝のために選んだと私たちは知っているのに。これは非人間的です」。吉川はしばらく沈黙した。静寂の中で彼の扇子の音だけが聞こえる。

会議主催者の配慮によって海外代表たちは長崎の寺院や観光スポットの蝶々さんの建物を見学し、雲仙という高い山の休養地にも一泊観光に出かけた。バスの窓から農村が見えた。海岸沿いに並ぶ作業員の集落の隣を通った。両側に高い木々、その下に食用キノコ栽培農場が見える。4 時間ほど山道を走ると静かなホテルに着いた。一晩中、窓の外に雨音がした。朝に日が昇ると、山に囲まれた高い大空が広がっている。雲が足下に見える山の中、国立自然保護区域で観光をした。山麓にゴルフ場があり、山中に乗馬用の小道がある。山の空き地では馬の傍で日本人が手綱を握って立ち、乗馬を勧める。彼らが馬の世話をする場面は感動的だった。近くにいた一人の日本人は、馬の足が蛇に咬まれ出血しているのに気づくと、あつという間に傷にくちびるを押しつけて血を吸い取ったのだ。

昼に雲仙市からバスで鉄道の駅へ向かい、列車で広島へ行き、その日は宮島の日本旅館に宿泊した。部屋にはベッドがなく、柔らかい床の上に軽い敷物と小さくて硬い枕がおいてあった。一人一人に着物が用意されていた。中国、チェコ、イタリア、ポーランド、ルーマニア、そしてロシア代表たちも全員着物を着て、舟の光が点滅し、星が映る夜の闇の川のほとりに夜遅くまで座っていた。翌朝は日本三景の一つとして有名な名所を見学した。神社の高い天井の下で昔の戦争物語を描いた絵がある。この神社で着物姿の少女たちが蓄音機から流れる音楽に合わせて踊っている。その歌詞は「宮島は素敵な場所です。ここへ遊びにきてください!」だという。恐ろしい仮面を被った背の高い人が蘭陵武王・高長恭の舞楽をしている。

その後、広島湾にそって街に向かった。海岸で所々刺網が海中に浮かぶ。竿と竿の間にテントをかぶせた小舟がすべる。住民は引き潮によって竿にたまった海藻を集めている。これら海藻はその後食用になる。アルコールの香ばしい匂いがする。「酒工場」だと案内人が言った。燃えるように暑い。バスの中で案内人がずっと何かを話し続けていたが誰も聞いていない。皆、夢中で窓の外を見ていたのだ。あの恐ろしい日に、泳いでいた何万人の子どもが死んだという広島の川が目の前に現れた。「平和大通り」と案内人は知らせた。爆心地の近くに来ると、正面に破壊された図書館の建物が見えた。建物に並んで高く生えた草、有刺鉄線、その上に色あせた木製の掲示板がある。私たちは死の実験を行ったこの場を沈黙して見つめて立っていた。川の向こうに新しい公園があった。そこに植えた棗椰子の木はあまり伸びていない、と聞いた。その後、広島原爆死没者慰霊碑へ行った。慰霊碑は特徴的だった。弓形をした粗石で全体をかぶせた墓石。私たちは日差しで熱くなった石の上に生花を置き、頭を下げた。そこから資料館へ静かに向かった。過去のすべてが大きな写真に描写されている。煙、火、火傷を負って生きている人も死んだ人も破片や灰の中にいる。ガラスの中に家財道具、子どもの靴、食器、時計などの展示物が並んでいる。

展示物で一番印象に残ったのは、8 時 15 分で止まっている四角の時計だった。後日東京で「広島の子供たち」という、小学生の時に原爆のために家族を失い故郷を離れて教師になった女性の人生を描いた映画を見たのだが、その映画に 1945 年 8 月 6 日の朝の広島の様子がよく描かれている。時計が 1 分ずつ進む。男たちは工場へ仕事に行き、子どもたちは学

校で朝の体操をしている。店員はお店を開けている。人々は街を楽しげに自転車で走っている。しかし広島の上空を米国の爆撃機が飛び回っている。時計は8時15分になり、世界は恐ろしい霧に包まれる。

私たちは広島でわずかな時間を過ごし、市長の家で昼食を食べた後に中央通りを通って駅へ向かった。「アメリカ文化センターの建物です」と案内人の女性が左側の灰色の建物を指して言った。河川や運河に何百人の子どもが泳いでいる。広島は再び多くの子どもたちに恵まれている。子供たちは川岸から飛び降りて川に潜ると水が飛び、太陽の光で虹が見える。子どもたちをオンブするお母さんたちがいる。平和記念公園へ子供たちは走る。人生は続いている。

大阪の花

私たちは昼間に疲れ切って、夜にやっとベッドにたどり着くと倒れこんですぐ眠り込むようになった。高温多湿の気候にも不思議に慣れてきた。もう、箸を使ってご飯を食べることもできる。海外代表はどこへ行っても花で歓迎され、バラ色やブルー、鮮紅色、燃えるようなオレンジ色と、色とりどりの花を贈られた。東京や長崎、広島でもそうだし、大阪でもそうだった。長崎から海外代表が大阪に到着したのは蒸し暑い夜で、エアコンで涼しいホテルに宿泊させてもらえるのが嬉しかった。人口400万人の商工業都市は夜中まで賑わっている。

大阪の社会団体を代表する人たちが駅で私たちを迎えてくれた。朝、ホテルのロビーにある自動回転ドアの近くで見た場面は面白かった。長身で細身のアメリカ人と小柄で太った日本人が、頭を下げる競争でもするように、互いにお辞儀していた。アメリカ人が日本人にそんなに頭を下げるのは、まだ交渉がまとまっていないのだろう。「アメリカのビジネスマンは交渉がまとまった後は頭を下げないから、日本人は彼の耳に声が届くように椅子の上に立つことになるんですよ」と、友人の記者が吹聴していた。

会議以外の時間は自由だったので市内観光に出かけた。とても暑い日で、荷物が山積みの小型三輪や、荷物を高く積み上げた三輪の自転車が街を走り、いたる所にカラフルなポスターが貼ってあり、交差点では車のクラクションの轟音、排気管の音、ドライバーの叫び声に取り巻かれる。通りを掃除する小柄で皺深い婦人たちがびくびくしながら歩道に寄っている。屋根つきのショッピング・アーケードに行くと、卸売をしていた。「男性用靴下なら男性用靴下だけ、女性用下着なら女性用下着だけを卸しています」と和田が言った。店には商品が山のように積重なっている。他の多くの日本の都市と同様、大阪の街は戦時中にアメリカの焼夷弾でひどく焼かれた。が、破壊や火災の痕跡はもう目立たない。戦争中に破壊された主要なショッピング街には銀行や商社の建物が立ち並ぶ。

招かれた夕食の席で会った一人の弁護士に「お忙しいですか？」と聞くと、「忙しすぎです」との返事。顧客は大勢いるが、労働組合の弁護士なので収入は多くない。労働者を騙して搾取する工場所有者の例は数限りなくあり、彼はそんな労働訴訟に取り組んでいる。その日の夕方、海外代表たちは大阪の労働者集会に参加した。会場は大きなプールで、私たちを乗せたバスが到着した頃には日が暮れて、あたりは暗くなってきていた。私たちは玄関の所で大勢の人に迎えられ、会場では何千人もの人が席から立ち上がって歓迎してくれた。白い鳩を描いた多様な色の旗が見える。そして、ここでもたくさんの花。海外代表が着席した長

い机は花で満ちあふれていた。私たちのすぐ前にプールの上を横切って木材の舞台が作られていた。

その舞台で広島悲劇に捧げる沖縄女性の舞踊やチャイコフスキーのバレエ組曲「くるみ割り人形」が披露された。そんな最中にスタジアム全体で笑い声があがった。驚いて「どうしましたか？」と聞くと、「5歳の女の子が迷子だという知らせです。親御さんにプール事務室に来るように知らせているのです」と通訳が言うのでほっとした。会議主催者の一人である安井教授に「何千人が会議に参加しましたか？」と尋ねると、約2万5千人位とのこと。会議が終わると何千人もの人々に取り巻かれて、私たちはまた花を贈られた。数十人、数百人の人が握手をしようと手を伸ばしてくれた。私たちがバスに乗りこんでからもバスの窓へ手を伸ばす人々がいて、バスが出るので「バスにはねられますよ、気をつけてください！」と叫んだが、言葉は通じない。日本人たちはロシア語で何度も「同志！」と呼びかけてくれた。興奮する雰囲気の中でホテルに戻り、「日本人はロシア人が嫌いだとよく言われるけれど、それは違うのですね」と誰かが考え込んだ様子で言った。

翌日、右翼の新聞はこの集会が失敗して会場に4000人しか来なかったと報道していた。私たちの親友で同行者の和田が新聞を見せて、毎度のように嘘の記事を出している、と言う。

古都訪問

会議主催者たちは海外代表たちを思いやり、古都を観光させようと決めた。猛暑だったが、もう慣れてきていた。通過した大阪の中心部はよく整備されており、小さな家や食料品店や織物商が並ぶ道筋も見た。小高い丘にはたいてい仏寺がある。家の前で多彩なりボンや紙の花がやさしい風にはためいている。清潔な服装の人たちが寺院へ向かって歩いている。彼らの表情は厳粛だった。今週は仏教行事の一つとして死者の魂が生きている人に会いに来るのを祝うお祭り（お盆）が行われているのだとわかった。生きている人々の所に1週間過ごし、その後に魂をあの世に送る、という。

古都奈良まではわずか50キロ。バスは埃の多い道路を疾走し、両側に隙間なく並ぶ家が見えた。やがて町を離れ、村落が現れたが畑は見当たらなかった。奈良の近くに一か所だけブドウ畑の緑豊かな斜面が見えた。和田が「今ここにブドウが見えるが戦争時にブドウの木を掘り出してその代わりにここで小麦の種を蒔いていたんですよ。我々にはパンが不足していたから」と話してくれた。

奈良は餌付けされている鹿が遊ぶ公園で有名だ。大きくて太い木々の下でラッパの音が響く。突然あちこちから鹿が柵をさっと飛び越えてくる。鹿は私たちへ勇ましく近づいてきて絹のような柔らかい顔を手に突っ込む。どうしたらいいのかわからないでいたら仲間が助けに来てくれた。近くの森林の縁では、ほっそりした日本人女性が立ってワッフルに似た焼き菓子売りをしていた。鹿は雌より雄のほうが積極的に突いてくる。最初私たちは不安で雄鹿の角を見張っていたが、すぐに餌のやり方を覚えた。その後、奈良が日本の都だった時代に建設された東大寺へ行った。本堂（金堂）に巨大な大仏が鎮座している。約1200年前に聖武天皇が仏教の楽園を地上で建設すべく建立したものだ。壮大な建造物は二度の火災で焼損したが、世界最大の青銅製仏像の一つである大仏は修理されたという。私たちは細くて神秘的な目を持つ巨大な仏像彫刻の傍に立って見上げた。大仏の足元に同じく青銅で作られた蓮の花がある。東洋では蓮が平和の象徴と考えられている。昔も今も、仏陀は平和の創始者でそ

れを見守っていると語られている。お寺の屋根の下では鳩がクークー鳴き、出口の傍では職人たちが働き、仏像の土産物を 1000 円で買うよう勧めている。私たちは顔を見合わせた。誰も人生の最後まで仏教徒になりそうでないが、この土産物の仏像を日本の古都を訪れた思い出として持ち帰るのは嬉しいことだった。

お寺の近くに大きな池があり、その傍にイザベル・ブルームとモニカ・フェルトンが立っていた。二人は女性の店員から買った細長い白い棒パンの一片を池へ物思わしげに投げながら透明な水の中を見ていた。水中では大きな金魚と亀が互いに争い、てんやわんやの騒ぎが演じられていた。

古都の全部が昔風というわけではなかった。名所見学の後、奈良ホテルで昼食を食べようと静かな街路を通った途中、バスの窓の正面に 2 階建て木造住宅が見え、その向こうに針金を巻きつけた柵が続いているのが見えた。「何ですか？」と聞くと、通訳者が「ここにアメリカ人が住んでいます。米軍基地の一つが奈良にあるのです。米軍は奈良を兵士と将校の休憩所にする予定です」と答えた。「日本の古都を？」「ここは静かで気候も他より良い土地です。彼らにはそれしか興味がない。どうして彼らが日本の聖地を傷つけないといけないのでしょうか？でも奈良の住民はこの暴力に抵抗して闘っています」。

バスで午後 4 時に京都のホテルに着くと、花を持った日本の生徒たちが海外代表を迎えてくれた。和田が近づいてきて、「このバスで大阪に戻るようお勧めします。電車だと夜遅くなります。明日は高知に朝早く出発しますから」と言った。私たちは日本の夜の生活をもう一度見たいとバスで帰ることに決めた。まるで、走りながら本を読んでいるような感じだった。農民は菜園でキャベツを数え、川浴いで子供たちが魚釣りをしている。夕焼けのバラ色の反射が水面に光る。建物の隣にある歩道で少女たちがボール遊びをしている。自宅の外の低い腰掛に座って新聞を読む男の人がいる。労働を終えたこの人は疲れていても世間の出来事が知りたいので 50 円を払って新聞を買い、全世界を手にとる。今日最後の荷物を運びようと自転車のペダルを一生懸命に踏んでいる人がいる。左手でハンドルを持ち、右手でポケットから硬貨を出して指で数え、隣を車が走り信号が点滅しているのに気にせずに、硬貨を数えながら走っている。今日の収入はどれくらいかな、と。

地平線上の台風

蒸し暑い中を一日中旅した後入浴し、汗と埃にまみれた頭に石鹸をつけて汚れと疲れを洗い流すのは、やはり最高の快樂だ。その時、ドアをノックする小さい音がした。「どうぞお入り下さい」。和田がソ連代表団の秘書セルゲイ・ハーリンと一緒に入ってきた。「お休みになるところですね」「はい」。2人は顔を見合わせた。ハーリンが新聞を見せて、「ここに書いてあるのですが、明日飛行予定の四国方面に大きな台風が来るそうです」「飛行機に乗るのは 1 時間だけでしょうか？」「全便欠航です。9 時半の電車に乗らないと間に合いません」。それで急遽出発することになった。

スーツケースは大阪に預けていくことにした。東京に戻る途中にまた大阪に寄ることになっていたからだ。イザベル・ブルームは荷物をまとめるのに時間がかかってなかなか部屋から出てこない。海外代表の護衛としていつも同行してくれている親切な山本も姿が見えない。彼は出発が早くなったのを知らないで、夜の自由時間に散髪に出かけていた。もう午後 9 時 15 分だ。「駅まで 5 分で着きますよ」と和田は言った。そこへ散髪でさっぱりし香水の

匂いがする山本が戻ってきて、スーツケースを取りに疾風のようにホテルの部屋へ駆け上がった。9時20分頃にイザベル・ブルームは通訳者と一緒に降りてきた。玄関にいたタクシーは一台だけなので海外代表7人がその小さい車に乗り込み、9時25分に駅に着いて、車から飛び降りた。「スーツケースはどこですか?」。イザベル・ブルームの声だった。通訳者が彼女のスーツケースをホテルに忘れたのだ。とにかく先に高知に行くことにして私たちはプラットフォームへ急いだが、和田がどのホームかを忘れていたので人に聞きながら走り続け、汽笛の音と同時に列車に飛び乗った。後ろで空気圧作動式のドアが閉まったのでびくっとする。列車はほぼ満員だが、離れた席が幾つか空いていた。二等車は座席が硬くて座り心地が悪く、ほの暗い。なるべく快適に過ごそうと、隣の窓側席の人は空気枕を取り出して壁に当てて目を閉じた。列車はしばしば停まり、中はますます人が増え、後から乗った客は座席の間の通路に座ってポケットから出した本を読んでいた。和田が列車を降り、小さい瓶に入れた暖かいコーヒーを持ってきてくれた。居眠りしても頭をもたれるところがない。窓の向こうは真っ暗になり、夜霧の中に黄色の丸い明かりが見える。列車が揺れると眠っている乗客も揺れる。そんな5時間が過ぎて、深夜3時に瀬戸内海沿岸の宇野駅に着いた。ここで船に乗り換える。乗客者はトンネルへ急いだ。鞆や籠や包みなどを持った人の群ばかりが見える。小さい子を連れた女性が多い。その一人は片手に幾つも鞆を持ち、片手で眠たがる子を抱き、歩ける子も連れていた。他の人に追い越されたり押しのけられたりして、女性は緊張した表情で振り返って子どもに何か言っている。ハーリンがその子を抱えてあげると女性はほっとした様子だった。

汽船の中も狭い。左舷の近くに風下側の場所をとる。船の外板に波が打ち寄せて、風がうなり、蒸し暑さが少し和らぎ、涼しくなった。出航すると乗客たちは居眠りを始めた。反対側に座っていた白髪まじりの男性が、「ロシア人ですか?」と話しかけてきた。「その通りです。貴方はどなたですか?」と聞くと、笑みを浮かべて「木材業者です。商売人ですよ」。「商売相手は?」「南米です。ニューヨークにも木材を売っているんです」「日本の木材を売るのでですか?」「いいえ、木材はフィリピンのマニラで買います」。彼は大阪の住所を書いた名刺をくれて、「そこに私の工場があって木材の再加工をしているのです」。「ロシアとの取り引きは?」「是非したいです。今まで外国と貿易関係がなかったのが悩みですね。近所の国同士なのに」。「まもなく関係が良くなると思いますよ」。「早くそうなってほしいですね。どこに提案を出したらいいか教えてください」。

その次に乗った列車は閉まらない窓もあり、列車内に隙間風が吹いた。列車が発車すると、私たちは隣の人を見る余裕もなく眠った。

ドクター坂本からの桃

うたた寝状態で何時間か過ぎ、小さい駅に着いた時、誰かが私たちのことを訪ねてきたので目が覚めた。「皆さんは最前列の座席にいらっしゃいます」と答える車掌のしわがれ声が聞こえた。黒いスーツにネクタイ姿の人が列車に入ってきた。「坂本先生!」と和田が声をあげ、私たちに「国会議員のドクター坂本です」と紹介した。目覚めたばかりの赤い目をした私たちは、私たちに会うためにこの駅まで来てくれた坂本と握手を交わした。「台風が来て残念でした」と彼は笑顔で言った。

列車が発車すると、雨や風の幕を通り抜けて灰色の薄明かりが窓にさし込んできた。車窓

から、風で木が折れて枝が撒き散らされている様子や黒い山々が聳えている景色が見えた。ある駅で列車が長く停車した間、それまでソ連代表団の医師ウラジミール・エマルコフと結核治療方法を話し合っていた坂本が、列車を降り、桃が沢山入った小箱を持って戻ってきた。

「やむをえません、皆さんをがっかりさせてしまうことになりました。列車が峡谷の出口で停まりました。ここは阿波川口駅です。看板がそこに見えます。台風で川の上を渡る橋から列車が吹き飛ばされかねないので注意が必要です。ということで、しばらくここでこの桃を食べて待ちましょう。・・・どんな時も桃は美味しいです。皆さんは眠いですか？ 桃を食べたら目が覚めますよ。どうぞ食べてください」。

桃は本当に美味しかった。日本はサクランボが有名だと思っていたが、今は日本で最も美味しい果物は桃だと言っておきたい。私たちの誰かが隣の人に「日本の桃は本当に素晴らしい」と言うと、その人は「その通りです。私たち日本人は桃のピンク色の優しい花が大好きなのですよ。」私たちは桃を1個、もう1個、と食べたが、列車はまだ動かない。坂本は車内の乗客全員に桃をご馳走し、「お世話になりました」と一人一人に挨拶をした。坂本は私がいつも手を耳に当てている（隙間風のせいで耳が痛かったの）のに気づいて、「もう1個食べて下さい。それでも痛かったら高知に着いたら私が薬を届けましょう。2錠も飲めばすぐ治りますよ」と言ってくれた。

列車に座り続けて疲れたので木造駅舎の底下のホームに出てみると、下の方で、谷間を蛇行して流れる川が激しくうなっている。垂れ込めた雨雲が岩壁と一体になって見える。列車へ戻ったが、坂本は落ち着かず、またどこかへ行き、やがて明るい表情で戻ってきて、「3時間ほど到着が遅れていますが、開始を待ってもらえます。長崎大会報告集会は12時開始予定ですが、その時間を変更してもらえたから大丈夫です」と言った。列車が俄に動きだし、駅を一つ二つと通り過ぎ、橋を渡った。トンネルが現れては消えていく。桃を全部食べ終わり、ドクター坂本も私たちも居眠りをした。

車内に太陽の暖かい光が射し込んできて目を覚ますと、もう12時だった。窓から、折れた板や丸太の断片が川の渦に巻き込まれながら石に当たって跳ね上がる様子が見える。農民たちがレインコートを着て大きい帽子をかぶり、網のついた長い棒を持って川岸に立ち、急流の中から魚をとっていた。田んぼは浸水し、稲がなぎ倒されていた。その中で腰をかがめて手を水の中につけて探る農民の姿が見えた。時々立ち上がっては雨や風で倒された稲を出してきて見つめていた。小さい駅の一つで看板を手に持った人々が私たちを迎えた。「私たちを歓迎しています。外に出ましょう」と坂本が言った。私たちがホームに出ると、尾羽が何メートルもありそうなほど長いオス鶏を手にしたお年寄りが、「こんにちは、ソ連の皆様！」と、心のこもった挨拶をしてくれた。「なぜ、この鶏を持ってこられたのですか」と聞くと、坂本はこの質問を待っていたように、「皆さんが面白がると思ったからです」と言った。列車の車輪がゆっくりとカタカタになっていた。

高知に到着！ 温かい歓迎と花束

高知のホームには駅長以外に誰もいなかった。「ひとつお願いがあります。私たちは顔を洗って1時間ほど寝たいです」と言うと、「はい、はい」と言いながら坂本は謎めいた微笑を浮かべた。駅の小さな待合室を通りぬけて反対側の外へ出た私たちは驚いて立ちすくんだ。正面にプラカードを持った数百人が立っていた。突然、よく知っているメロディが聞こ

えてきた。言葉は分からないが、これはソ連の国歌だ！それは日本語で歌われていた。

太陽が積雲の間に出たり隠れたりし、陽光が建物を照らしている。市街を車で走る途中、200メートル先に走る先導車がマイクで市民に対してソ連代表者たちがやってきたこと、夕方プール施設で集会があることを宣伝していた。

20分後に劇場の建物に到着すると、そこに1500人ぐらいの人々が集まっていた。原水爆禁止団体の議長で76歳になる大石が演壇に上がると、集会参加者たちが鳩を飛ばした。全員起立して広島長崎原爆犠牲者を追悼するための黙祷が行われた。静寂の中、聞こえるのは劇場の屋根の下で鳩の声だけだ。集会は熱く盛り上がり、観客席から議長に次々と質問が出た。長崎会議の決定は全会一致で可決した。会議の後に市長がやってきて、「ソ連代表団歓迎会への出席をお願いしたいです。近くの学校施設内で行われます」と言う。私たちがその学校へ行くと、市長が、ソ連で捕虜とされていた元日本兵たちが来ていてソ連代表団と会いたがっているという。「おお、私たちもお会いするのは嬉しいです」と言って待っていると、力の強そうな、肩幅が広く日焼けした何人かの男性が部屋に入ってきて、「こんにちは！」とほぼ一斉に完璧なロシア語で挨拶し、手を差し出した。「来日して頂いて良かったです。皆さんと握手して、戦時にロシア人が日本人捕虜に親切してくれたことにお礼を伝えたいと思いました」と笑顔を絶やさぬ一人の人が言い、「私はタシケントの近くにいました」と続けた。「私はチタの近くにいました」ともうひとりの人は言い、「私の場合はハバロフスクの近くでした」と三番目の人は言った。「親切してくれて感謝しています。食料不足の中でも私たち捕虜に食事を与え、治療もしてくれました。この心ばかりのお土産を受け取ってください。自分たちで作ったものです」と1番目の人が段ボールを渡してくれた。その中には、マトリョーシカ人形と似た明るい色の人形が入っていた。「また、ロシアへ行きたいです」と背の高い人が言った。「ぜひ来て下さい。その時は（捕虜ではなく）お客さんとして来て下さいね」と私たちは言った。「それは嬉しいことです。私たちは習ったロシア語を忘れかけています」。「今度は囚人でなく、もっと快適な環境でロシア語学習したいです」と言い、彼らは笑った。「もちろん、そのために私たちも協力しますとも」と私たちは答えた。彼らは帰りかけたが、一人が戻って来て「皆さん、このお土産を少佐ペトロフに渡して頂けないでしょうか？」と、彼の所在を尋ねた。

歓迎会では全員長いテーブルに着席した後、学校の広いホールに音楽が響いた。「カチューシャ」だ。日本滞在中に何度もこの曲を聴いていたので、もう驚かなかった。市長が「平和のため、ソ連と日本国民の友好関係のため！」と乾杯の音頭をとり、小さいグラスで梅の味がする濃赤色の日本ワインを飲んだ。白髪の女性が立ち上がり、「今日は非常に嬉しいです。70歳で初めてソ連の方々とお会いしています。残念ながらいつも見かけるのはアメリカ人で、ソ連の人に会うのは初めてです」と言った。「私たちは異なる生活様式や体制の中で生きていますが、頻りに交流すると良いと思います。私は農民なのでソ連の農民はどのように生業を行っているのかを知りたいです」と小柄で細身の人が言った。元捕虜の人たちが再び私たちを取り巻いて、その一人が「私はソ連にいる時、ミチューリン農法を学びましたよ。1957年の夏にモスクワで開催される世界青年学生祭典の参加代表団にミチューリン派の人を入れるかを教えてくださいませんか？」と尋ねてきた。

夕方には高知市民5000人の集会があり、大阪同様、プールを横切って木造の演壇を作っていた。演壇の上に日本、ソ連、ベルギーの国旗がはためき、オーケストラがソ連とベルギー

一の国歌を演奏した。その後、夕方に高知入りしたイザベル・ブルームたちの演説が行われた。日本の鳴子踊りを私たちは楽しく満喫した。青い服を着た 200 人の子どもや何人かの大人がこの踊りに参加した。全員手に赤と青の鳴子を持ち、踊りの内容はシンプルだ。子どもが稲収穫の時に鳴子を使って雀を脅し追う。3 人ずつ並んだ子どもがプールを一周しながら同じ動きをして、リズムに合わせて鳴子を鳴らす。この踊りは感動的だった。一番小さい子たちもリズムに合わせてちゃんと動きをそろえていた。踊りは 30 分以内で早く終わったのが悔しく感じるほどだった。

四国での一日が終わると、坂本が家庭的な小さいホテルに車で送ってくれた。「お昼に休憩させなかったと怒っていませんよね」と彼が聞くので、わけが分からず驚いたが、後から「そうだ、列車を降りて 1 時間休みたいと思っていたのだった」と思い出した。

台風は通り過ぎた

朝早く眩しい陽光が窓から差し込み、目が覚めた。高知にいる。思い出深い昨日のことをすぐにふりかえった。日本に仲間がこんなにたくさんいたのだなあ。長い間両国は疎遠になり、日本の保守系新聞はソ連について根も葉もないことも言いふらしてきた。でも日本には、ロシアに憧憬を抱く人々もいる。元捕虜たちも。正直に言うと、私たちは日本で期待できるのは丁寧な挨拶程度なのではないか、と思っていた。すると現実は違っていた。蒔かれていた平和と信頼の種はこの人々の心に深く根づいている。捕虜の帰国船がソ連から日本に到着した時には、保守系新聞が扇情的な記事を狙って特別な報道陣を送り出したという。が、次々と元捕虜が帰国してもそんな話はなかった。帰国者はソ連の優しい人々を思い出していた。思いやりがあったという少佐ペトロフのことが思い出される。この四国の島にペトロフ少佐の友だちがいるとは感動的だ。

ホテルの緑の中庭は私たちを見送りにきた人たちの車でいっぱいだった。「よく眠れましたか？」と坂本が聞いた。車の隊列が空港に向かう。台風が去り風もやみ、空は雲一つなく晴れ渡っている。以前と同様、私たちの前を赤と緑の旗をはためかせたオープンカーが走り、「我々はソ連とベルギーからの訪問者をお見送りするところです。我々は訪問者をお見送りしています」と仲間がマイクで紹介している。小さい店から出てきた人々が私たちに手を振った。職人たちは作業台の後ろから背を伸ばし、自転車に乗っている人も手をハンドルから離して手を振った。路面電車の乗客は窓から私たちの方を見て微笑んでいる。街には貨物車や自転車が見え、小工場で金属のふれあう音が聞こえる。農村地帯に入ると、台風通過の跡が明らかだった。農民が腰をかがめて水の中を探り、稲を取っている。「私たちは訪問者をお見送りしています」という声を聞いて、彼らは腰を伸ばし、大きな帽子の下から皺だらけの笑顔で私たちを見て、畑仕事で疲れた手を振ってくれた。

高知の空港は簡素で、小さい木造建物と平坦な飛行場があるだけだった。飛行場で私たちを青色のパナマ帽をかぶった少年少女が迎えてくれた。空港から遠くない耕地でお米を収穫している農家があった。私たちは近づいて、彼らと話をした。この家族は近くに住んでいて、家族みんなで耕作をしている。農家のお母さんらしい高齢の婦人が、藁を入れた籠を車の傍まで引きずって移動させている。農民たちや少年少女たちに別れの挨拶をして、私たちは青い山々や黄緑色の耕地が広がる四国を飛び立ち、大阪に向かった。

大きな米国旗がはためくビルと隣接する大阪空港の小さな建物で、東京行きの飛行機を何

時間も待った。乗客は待合室のテレビで昨夜の台風被害を伝えるニュースを見ていた。新聞によれば、22人が死亡して、40人が行方不明になり、137人が負傷したという。台風で3,000以上の家が壊れ、500ぐらいの船が転覆したという。九州や四国にも大きな被害があり、九州の近くではスウェーデンの石油タンカーが転覆し、鹿児島港で浚渫船が沈没、小豆島の周辺でも漁船が沈没したそうだ。

まもなく東京に向けて飛行機は離陸した。過去2日間を振り返りながら無言で座席に座る。40分後、山本が私に近づいてきて窓の外へ指差しながら「富士山、富士山」と教えてくれた。最初意味が分からなかったが、窓の外を見ると黒い頂上が切り取られた山が見えた。「富士山ですか」と聞いたら山本が頷いた。